1880－90年代の漢学塾

――新潟県長岡町誠意塾の指導方法・カリキュラム・塾生の学習歴――

池　田　雅　則

はじめに

社会的地位を確立するに至っていなかった制度的な中等教育体系の間隙を縫って、1890年代にかけて多種多様なノンフォーマルな教育機関が存在していた。その多数を占める類型として、漢学塾があった。本稿では、1880年代から1890年代にかけて栄えた漢学塾の具体例として、新潟県長岡町の誠意塾を取り上げる。そして、その指導方法、カリキュラムおよび門下生の学習歴に着目し、先行研究と照らし合わせながらその時代的特徴を明らかにしていく。そこから、なぜ漢学塾が当時多数設立されていたのかという問いに迫りたい。

本稿でいうところの「ノンフォーマル」な教育とは、国家が発した個別の命令に基づく「フォーマル」な「学校教育の枠組の外で、特定の集団に対して一定の様式の学習を用意する、組織化され、体系化された教育活動」[1]のことを指している。筆者はこれまで、私立各種学校や私塾を対象としながら、全国レベルでの分析と個別事例研究の双方においてその通史的把握に努めてきた[2]。

これら研究によって示された重要な知見の１つは、1890年代初頭に至るまでのノンフォーマルな教育は、フォーマルな中等学校の「代替」「代位」という言葉では表現しきれないような、自生的で独自な発展可能性がありえたということである。20世紀初頭にかけて序列的・複線的な中等教育制度が確立して以来、現在まで継続するフォーマルな教育が圧倒的な権威をもつ状況とは異なる風景が、この時期までの初等後教育には広がっていた。

ノンフォーマルな教育機関については、設置の自由度の大きさゆえに機関ごとの性格の差異が大きい。本稿で取り上げる漢学塾１つを取っても、その性格は多様である。それゆえ、ノンフォーマルな教育機関の歴史的意義を明確に掴むためには、多くの個別事例を取り上げていく必要がある。1990年代以降本格的な蓄積が始まるが[3]、さらなる蓄積の一歩として本稿の意義があるといえる。

第１節では、新潟県におけるノンフォーマルな教育機関の動向を検討し、漢学塾が1890年代にかけて地域で必要な教育機関であったことを示す。そして第２節以下では、誠意塾の教師およびその指導方法、カリキュラム、門下生の学習歴を取り上げる。そして先行研究の中にその特徴を位置づけながら、当時の漢学塾の時代的特徴を明らかにしたい。

第１節　ノンフォーマルな教育機関と漢学塾の動向

本節では、1880－90年代の新潟県におけるノンフォーマル教育の全体的な動向について概観したい。本稿では、その全体的な動向を把握する上で、新潟県発行の学事統計を使用する。学事統計資料としては、文部省が発行した『文部省年報』が有名であるが、認可を受けたノンフォーマルな教育機関が区分される各種学校の学校別の情報が明らかにならない。そうした情報は、各種学校の認可主体である道府県のレベルの統計書に含まれており、本稿では県発行の『新潟県学事年報』・『新潟県統計書』(1880－1909) を検討する。

表１は、1900年までの新潟県における各種学校の学校数および生徒数について、学科ごとに類型化し、各中等学校、師範学校の数値と比較したものである。表１によれば、1890年代半ばくらいまでは、１校あたり50名に満たない零細な各種学校が広く設置されていた。そしてカリキュラムの傾向は、1880年代においては漢学を主とするものが多数を占めていたが、1880年代後半になると洋学を主とするものが出現し始め、1890年代にかけて漢学・洋学・数学を兼ね備える学校が主流を占めていく。また1880年代後半には、簿記や実科という教科をもった実業的な内容を前面に出した学校も現れてくる。そして1890年

表１　明治中期までの新潟県における各種学校と中等教育機関

	1881(明治14)年			1884(明治17)年			1887(明治20)年			1890(明治23)年			1893(明治26)年			1897(明治30)年			1900(明治33)年		
	校数	男子	女子	校数	男子	女子	校数	男子	女子	校数	男子	女子	校数	男子	女子	校数	男子	女子	校数	男子	女子
和漢学	15	538	157	18	726	127	13	457	22	7	185	23	8	81	32	5	167	6	6	177	36
和漢学・仏典																			2	116	5
洋学・西洋語学							2	217	1	4	259	35	2	80		1	132		2	236	
数学							1	32		1	29	2	1	29	1	1	26		1	25	4
和漢・洋							4	183		4	256	4				1	9		1	12	
和漢・数										1	30	1	2	112	19	2	90	2	3	164	6
和漢・洋・数										4	147	9	3	122	28	4	259	16	2	189	28
和漢・洋・数・実科													1	28		3	168		2	128	
普通				1	216								1	60	5						
簿記・商業				1	29		2	115	1	3	60	3	1	21	2	1	20				
獣医学													1	6		1	2		1	2	
産婆																1		12	3		133
裁縫・家政を含む「其ノ他」										3		115	3		273	3		191	4		197
初等水準のみ・「小学校=類スル」										1	19	22				2	57	4	4	37	178
私立各種学校合計	15	538	157	20	971	127	(22)	(1004)	24	(28)	(985)	214	23	539	360	25	930	231	31	1086	587
公立各種学校（女紅場）	4	5	196																		
師範学科	2	116	43	2	208	40	2	121	40	2	130	52	2	122	78	2	118	55	3	280	98
師範学科講習										1	60								3	112	38
師範学科簡易													1	28		1	63		1	31	
県立中学校	2	96		1	98		1	251					3	559		5	1703		8	2378	
郡立中学校	8	351	1	8	531		(2)	(180)		(2)	(179)										
県立高等女学校																			1		134
郡立高等女学校																			1		92
私立高等女学校							1		50	1		33							1		26
県立医学校	2	148	22	3	176	27	3	112	30												
市立商業学校							1	101		1	85		1	175		1	321		1	251	
県立農業学校	1	38		1	42		1	140		1	115										
郡立農業学校																			1	65	
私立実業学校													1	3	28	1	5				

注：生徒が在籍しない学校は校数に含めなかった。私立各種学校になった元郡立中学校（1887年・1890年）は郡立中学校の欄に記入し（括弧付数値）、私立各種学校合計（括弧付数値）には算入しなかった。1897年には県独自の判断で従来の「各種学校」が「専門学校」に区分されたものがあるが、ここでは「各種学校」に含めた。

出典：各年『新潟県学事年報』『新潟県統計書』

代末にかけて、産婆学や裁縫・家政などの女子をもっぱらの対象とした各種学校が設立されはじめる。

ここで注意しておきたい点は、学事統計に記載された教育機関のみがノンフォーマルな教育の場の全てではないということである。県から設置認可を受けなくとも、さまざまな形でノンフォーマルに組織化された教育の場が存在していたのである1880年代初頭の自由民権運動が盛んな時期には、各地に学習結社が結成された。たとえば、政治活動との関連性の強い演説会の開催（協同会、智研会）、「新聞縦覧書」（智研会）、「新聞雑誌類の購求又は質疑」（責善会）、「言語温習」（協同会）や「毎月十度の読会」（進取会）などである[4]。また、1890年代には次のような教育の場が町村に設けられた[5]。

西蒲原郡福木岡村大字舟戸の坂田俊三郎氏は同地方に未就学の者多きを慨嘆し、同村重立諸氏と共に本月上旬より夜学会を開き専ら作文読書珠算等を教授し余課に町村制の講義をなし、熱心に授業せらるるゆえ目下三十余名の入学生ありと。又同村大字福井の青年諸氏も同主意にて高橋平十郎氏を教師に招聘し同村一山寺内に夜学会を開き受教の傍ら殖産上の討論会を催ほし、既に五十余名の生徒ありて院主石橋光念氏も共に尽力せらるるといふ。

この夜学会は1890年に開かれたもので、後の青年会開催による夜学会や小学校併設の実業補習学校につながる流れの源流にあたるものとみられる。

表２は、明治期の学事統計で各種学校に区分された漢学塾を年代順にならべたものである。この年代は学事統計に記載された期間を示したもので、初め

表２　学事統計に登記された漢学塾

校名	所在地	代表者	学事統計記載	備考
自強校	新潟	広井・高橋・長谷川・藤井	1876-81	学制期76-79年は小学校
有隣館	中蒲原郡沼垂	田辺善作・寺田徳裕　他	1876-77,82-92	学制期76-77年に小学校
養正塾	中蒲原村松	堀重修・元恭	1876-77,85-91	※1　学制期76-77年に小学校
為宝塾	南蒲原郡安田興野	松田秀次郎	1879	松田は草莽隊居之隊元隊長
乾弘塾	北蒲原郡新発田本	菅井乾二・丹羽弘	1879-80	
天眞校	西蒲原郡金巻新田	朝妻国輔	1879-80	朝妻は西蒲原郡長になる。
精義塾	中頸城郡高田	宮川頼安	1879-80	
時習舎	中頸城郡高田	小山杉溪	1879-83	学制期79年は小学校　小山（1819-96）は蘭学者で高田藩校修道館で教授。
協力義塾	新潟	朝倉徳三	1879-84	学制期79年は小学校
青莪学舎	三島郡河根川	青柳剛	1879-89	
藍澤義塾	刈羽郡南條	藍沢美中・敬一	1879-94	開塾は1820年
顧古舎	北蒲原郡保田	白井能彦	1880	
静雲精舎	中魚沼郡高山	高橋茂一郎	1880-81	
精義塾	中頸城郡小須戸	星兵吾	1880-81	
北陸義塾	三島郡与板	斉藤三郎	1880-81	
長善館	西蒲原郡粟生津	鈴木健蔵・時之介	1880-1909	※1　開塾は1833年
朝倉校	新潟	朝倉志保理	1880-87	
啓進舎	新潟	有明興観	1880-90	
皇国塾	中頸城郡高田	大須賀信章	1881	
光霄塾	北蒲原郡浦木	曽我静次	1881-84	
困学塾	北蒲原郡築地	肥田野喜平治	1881-87	
汎愛私塾	中頸城郡市村新田	福田秋成	1881-88	
白玉園塾	中頸城郡高田	大須賀信章	1882-85	皇国塾の継続か
中山塾	古志郡小栗山	佐藤久太郎	1882-83	
青槐書院	三島郡本与板	斉藤三郎（和内）	1882-88	北陸義塾の継続か
不如学舎	新潟	藤井久三	1882-94	原敬が新潟税関吏の時に学ぶ。
上條義塾	刈羽郡野田	小林吉長ほか	1883	
以文義塾	新潟	脇山星陵	1883	
新潟夜学校	新潟	各務方一	1883	各務は新潟学校百工科学科生徒・新潟県職員・北越学館教員・新潟高等女学校教諭を歴任
通明館	新潟	鏡淵意伯	1883-98	居之隊員
修成学舎	新潟	諸橋浅三郎	1884	新潟学校教諭・『幾何画法教授書』を著す。
耕読館	南蒲原郡帯織	皆川大八	1884-93	
盈科学舎	北魚沼郡小千谷	石井重倫	1884-93	
南崖塾	中頸城郡小原新田	高坂断二	1885-86	
明誠校	西蒲原郡弥彦・地蔵堂	渋木正胤	1886-89	※1　渋木は長善館出身者
竟成館	南蒲原郡四日町	松田秀次郎	1887	
河合学校	中蒲原郡新飯田	河合義之	1887-1902	
嵐陰義塾	南蒲原郡庭月	諸橋安平	1888-89	安平は諸橋轍次（『大漢和辞典』編纂者）の父
江東学舎	中蒲原郡沼垂	金子長吾	1889-92	※2
内山塾	西蒲原郡三条	内山達三郎	1891-93	
養気塾	新潟	岡田有邦	1891-93,1902-06	1902再設立か
立誠塾	西蒲原郡中之島	大竹保有	1891-96	
時中学舎	刈羽郡田沢・野田	力石友之助	1893-1906	
静修学舎	中蒲原本下田・村松	奥畑義平	1894-1909	※1　奥畑は旧村松藩士・文武館副館長
鯖渓学舎	刈羽郡石曽根	久保田泰助	1894-95	※2
成文学舎	北魚沼郡小千谷	石坂正次	1894-1909	
当務校	北蒲原郡築地	浮須市五郎	1895-1909	※2
斯道館	北魚沼郡小千谷・山本	目崎精松	1897-1909	※2
魚沼義塾	北魚沼郡小出	山田八十八郎	1898-1901	山田は刈羽郡長・南蒲原郡長・北魚沼郡長を歴任
蛍雪舎	刈羽郡比角	丸田尚一郎	1898-1909	※2　丸田は誠意塾出身
誠意塾	古志郡長岡	高橋竹之介	1899-1901	開塾は1881年。「私立学校令」で設置認可か。高橋は長善館出身者
嚮外塾	古志郡長岡	木曽恵然	1899-1909	浄土真宗長永寺に1845年設立。「私立学校令」で設置認可。小野塚喜平次（東大総長）が学ぶ。
育英塾	北蒲原郡黒川	布川瀧太郎	1906-09	

注：休業中のものは除く。　※1：後に英学を加えた。※2：算術・数学を兼授している。
出典：『新潟県学事年報』『新潟県統計書』『文部省年報』『新潟県義務教育百年史 明治編』『越佐維新志士事略』『北越名士の半面』http://www.tyoueiji.com/index.htm（長永寺ホームページ：嚮外塾）

て記載された年が塾の新設された年であるとは限らない。たとえば筆者がこれまでも注目してきた長善館は、学制期には学事統計に記載されない。本稿で注目する誠意塾もその設立は1881年であることが分かっているが、学事統計にその名が現れるのは閉鎖間際の1899年となっている。また長岡町の寺院が開いた嚮外塾は1845年設立ながら、認可がされるのは「私立学校令」後の1899年である。学事統計に初めて記載された年は、あくまで塾が行政に公認された年であると考える必要がある。

以上を踏まえて表２をみると、既に英学等の新たな学問が紹介されてから久しい1880年代（明治13年－22年）になっても30校近くの漢学塾が設置認可を受けている。1890年代以降になると設置の勢いも弱まるが、なお15校ほどの塾が新たに認可されていることは注目される必要があろう。そして塾の一部には、先行の漢学塾で学んだ者が新たに開いたものもあり、漢学の知識が地域で新たに広がりをみせる余地がなお残されていたことがうかがえる。また漢学塾の中には、後に高等教育を受けて名を成した人物が学んでいたものがある。これは、明治の漢学塾が担った役割を考える上で重要な点である。

一方でフォーマルな教育機関である中学校は、学校の設置基準が厳格化された1884年「中学校通則」や、県費補助の中学校が県当たり１校のみに限定された1886年「中学校令」の影響で、1880年代後半から90年代初頭にかけて一時的に潰えることになった。だが、「中学校令」が1891年に改正され、県に１校以上の中学校を設置することが条文上義務づけられてからは、各地に中学校設置の機運が高まり、1900年代にかけて急速に普及していった。

以上述べてきた新潟県におけるノンフォーマルな教育機関および中学校の動向は、大筋において全国的な動向に一致している[6]。本節を踏まえて次節以下では、誠意塾の事例を取り上げ、当時の漢学塾の教育の実態と役割について深めた検討をしていきたい。

第２節　誠意塾の教師と生活上の指導

（１）『長岡教育資料』と誠意塾

誠意塾については、1917（大正６）年に刊行された『長岡教育資料』に詳しい[7]。この資料は、長岡藩時代から当時に至るまでの長岡周辺の教育について、それぞれの教育機関を知る人物から得た手記から構成されている。長岡市内の教育機関で取り上げられたのは、長岡藩校崇徳館、長岡学校（旧制長岡中学校）、新潟県農学校、長岡女子師範学校、長岡市立商業学校、新潟県立工業学校、諸々の小学校といった、藩士のための教育機関や制度内のフォーマルな教育機関に限られなかった。私立各種学校として、主に学齢外の貧しい子弟を教育したといわれる仙厳学園、女子に中等教育を施した私立長岡女学校も取り上げられている。そして誠意塾は、２章50頁に及ぶ記述がなされている。誠意塾が地域において無視できない地位を確立していたことがうかがえる。誠意塾については、「籠手田氏が新潟県の知事で先生とは意気相投じて居られ（中略）長岡へ巡視に来られた時自身駕を枉げて先生と快談数刻の後、講堂に塾生一同を集めて『智仁勇三徳』を説かれ」たというように（『資料』344頁）、県のトップからも認知された漢学塾だった。

誠意塾については、1881年に入門した武石貞松（南蒲原郡長呂村）と1893年に17歳で入門した丸田尚一郎（刈羽郡四ツ谷村）の２名が、在籍当時の記憶をたどりながら誠意塾の教育の再現に努めている。実際に学んだ者の証言ゆえにその内容は非常に具体的である。とはいえ注意しなければならないのは、資料が刊行された大正期の教育認識が塾の実態に読み込まれ、その一部分が偏って取り上げられる可能性である。本稿ではその点に注意しながら、事実に関する論述に絞って手記の内容を取り上げたい。

（２）誠意塾主・高橋竹之介

誠意塾は、長岡町殿町に1881（明治14）年に開かれ、1901（明治34）年に一応閉じられた[8]。塾主の高橋竹之介は、天保13年に南蒲原郡中之島村杉之森に生まれた。三島郡本与板村の斉藤赤城に学んだ後に1862（文久２）年11月に西蒲原郡の漢学塾長善館に入館し、初代館主鈴木文台に師事した。彼は、翌年まで塾にいたようだ。

長善館を出た彼は諸国の遊歴をはじめ、尊攘思想に深く傾倒していく。文久３年には播磨の河野鐵兜（かわのてっこう）の門に入り、また志士の組織化に努めた森田節斎の招きに応じて讃岐の日柳燕石（くさなぎ）を訪ねた。帰郷中には「楠公の墓を拝し血を刺して殉国」を誓った。1867（慶応３）年の帰郷後は、豪農層の草莽隊であった居之隊の活動に身を投じた。維新後は、「聖駕還幸の論更

に募り頗る切迫せるを以て、両回沢外務卿に迫り意を達せず、明治三年三月東京府に逮捕せらる。蓋し去年沢公に迫るの手続を吟味せらると雖も、別に疑ふべきことなし、然るに同志中反覆の徒あり、遂に瓜蔓株連数人縛に就き、四年四月司法省に於て不容易の事件両度相企つるを以て、除族の上十年禁獄の罪に問はる。五年五月新潟県獄に移され十一年十一月減刑明年三月赦に逢う」という経歴をたどる。東京への遷都の議論が高まったことに不満を募らせ外務卿に「迫」ったことが、同志の裏切りのために脅迫行為と認定され、不本意にも大逆的活動家として政府に逮捕された（『資料』327－338頁）。

恩赦後は一時三條町の「蔵小路にトし弟徒に授け」たが、その居が火災に遭ったことを受けて郷里の杉之森村に戻り、来学者に教授をした。81年には居を長岡に移したところ「弟徒四方に集」まり、83年に宿舎を築いて「誠意塾」と名づけた。1901年の閉塾の際には「及門の諸弟子相謀り、金三千五百円余を醵し養老の資と」なしたという（『資料』338頁）。彼は、1909（明治42）年に69歳で没した。

（3）塾生への生活上の指導

高橋竹之介の指導方法について、まずは生活上の指導からの側面からみていこう。高橋は、「自分の處へ学問をするのみで来ると思ふは間違である。本は読まねばならず知り折居ることは教授もするが品行を端整にして雑役も執り粗食もして（中略）多少の学問と同時に子弟たる本分を尽さねばならぬ。其代り雑役も粗食も自分が率先してやるから、自分のやる通りにやるなら苦情もあるまい。学生などと思つて生意気の風でもすると許さぬ」というように、漢籍の教授に限らず、生活面での指導も積極的に行っていた（『資料』314頁）。具体的には次のようなことである。

> 席は長幼の序といふことで年長者が上席する、食堂に就く時は先生が中央に坐し双方に分かれて年順の坐順の坐席です。食器は箱膳で各自に洗仕末をする。朝の粥と昼の雑炊が常例の食事で、夕飯に皿がつくといふ風で、朝の粥では昼まで持ち切る訳に行かず空腹で困るが、これも先生の前であるから小言も出す訳に行かず、室内の掃除は申すまでもなく大小便所から洗面所、釜場の掃除は一切当直の受持し、日々の薪割りとか屋根替、菜採り、大根洗ひまで先生が率先して徒弟も筒袖股引で従事したものです。（『資料』315－316頁）

このような雑役をさせるのには理由があり、「つまり此処にでも来ぬ時はこんな雑役は一生涯することのならぬ連中が多くあるから、人を使ふというものは先づ人に使はれて見ぬと思遣りがないから、其を訓練する」ためであったという（『資料』316頁）。「一生涯することのならぬ」ような雑役を命じることで、将来「思遣り」を持った「人を使ふ」立場に立つ者になるように「訓練」するのである。

そして高橋は「父母の代理として御預りをする」という考えから、雑役を命じるに限らず「自宅に居り父母の許で我儘」をしがちな生活と遮断するために、子弟の行動に積極的な干渉をしていた。

> 門外出入必要稟告
> 飲食物品厳禁購入
> 書信贈答総経検査

誠意塾では上の３ヶ条以外しか明らかな規則がなかったという（『資料』314頁）。だが、これら３ヶ条を厳格に守ることが塾生に求められたのだ。

第一の外出時報告の義務については、「医者に行くとか買物に出るとか外出の例日にならざる時は必ず一人では行かれず、必ず他の一人を同行せしめたもので、外出の例日でも単独外出は厳禁でありました。三々五々隊を為して歩行し出入とも先生若くは奥様に必ず来往を告ぐるのが例であります」という厳しい制限を伴ったものであった（『資料』315頁）。

第二の飲食物品購入の厳禁については、「金銭を浪費」させないためであり、塾生には「一々許可を得ぬ(ママ)ければ金銭は一厘も手許に置かれぬとの申渡し」があったという（『資料』315頁）。だが、指導の及ぶ塾内での飲酒はむしろ盛んにされた。すなわち、高橋自身は塾中で「田中春回翁（旧長岡藩士・長岡学校教員―筆者注）や細貝清逸翁と快飲」する無類の酒好きでもあった。「塾生にも他へ出でて飲むな。塾では飲ませるという風で、幹事取締などの慰労はいつも酒」であり、「塾で一同飲む時は必ず平野二郎の月照を弔う花の都の今様長歌が出る、一人音頭を取ると一斉に和するので近所では又始まったといふ位、時々此の余興」を行なっていた（『資料』326頁）。

そして第三の書信等の検閲については、「虚病をつ

くりて宅へ帰りたいといふ幼年時代はまだしも、遊びの打合せや金銭の自由を得るなどの秘密用件が伴ふ時代となつては頗る注意を要する」からだという(『資料』315頁)。そして、このような厳しい干渉を貫徹するために誠意塾は「仮令市中より参り居るものでも必ず寄宿といふ例」であり、「他から面会で来るものも塾へ通るなどは断じて出来ません。父兄と雖も先生の面前で用談」するという塾外との遮断を試みている(『資料』314－315頁)。このように厳しい干渉を加えた理由は、「外出を利用して遊蕩の仲間入りでもしては父母の代理たる役目がすまぬ」ということであった。

それゆえ、一方で高橋は「病気とか何とか気の毒の出来事の生ずる場合は、殆んど寝食を忘れて注意せられたもの」であったという(『資料』317頁)。手記を寄せた丸田尚一郎は「私が塾で重い風邪に罹りました時などは、先生と奥サンと骨肉も及ばぬ親切にしてくだされました。私は幼少の頃から蒲柳の質でありましたので、在塾の当時は同じ雑役を命ぜらることにも、『丸田おまいはチト休んだがよい』と云はれたのであります。其の同情心に深くあられた事は決して厳格一点張の人でない事が明かであります」とも述べている(『資料』340頁)。

彼の生活上の指導は環境を統制する傾向が強く、また父権的なものだった。しかし、高橋が一線を退いた時に3,500円ものの資本金が集まったことからは、その方法に対する塾生からの賛同は小さくなかったことがわかる。誠意塾の生活面にわたる指導は「学問を以て身を立つるを必ず主眼とせず」(『資料』325頁)、「所謂郷先生の立場より一郷の善士を養成するが先生の目的にして」(『資料』325頁)というもので、「地域指導者層育成」[9]の役割を重視していたといえる。

第3節　誠意塾のカリキュラム指導

すでに述べたように、誠意塾には詳細な規則が存在していないためにカリキュラムについても明確な規則が残されていない。しかし、門下生の回想をみると明文化されないまでも規則性のあるカリキュラムが存在していたことがわかる。ここでは、書籍の学習、漢詩文学習、体を動かす活動に分けて述べたい。

書籍の学習については、誠意塾では次のような学習順序を取っていた(『資料』319頁)。入門した塾生はまず「山子点の四書五経」を第一に学び、「四書五経が済むと日本外史、十八史略、文章軌範、蒙求、綱鑑易知録、資治通鑑というやうの順序」で、徐々に難易度の高い教育内容に進むことになる。ただし、「それも日本外史までは素読で、外史も一二巻も素読すると他は独りで読み不審を素読時間に先輩諸氏へ質すといふ風で、其他は一切自分にて読み不審を質問する」という体裁であった。塾生には「幹事」という役職があった。彼らの中には「会幹をするもの年少者の詩文を添削するもの」などが居たという(『資料』321頁)。また、「他に参考として読みたきものは何でも勝手に読む」ことができたという(『資料』319頁)。師匠である高橋がすべてのカリキュラム指導に関わるのではなく、その一部分は年長の塾生や塾生の自主性に任されていたのである。

なお一時期、「川本直吉君が在塾中数学を教授」したというように、数学の教授も行っていたようだ(『資料』322頁)。

高橋は塾生の自習によって生じた質問への応答に加え、平素は講義や輪講を行なっていた。講義内容については、「孫子や論孟の講義外史論賛の講義を試みられた」。また、「会沢正志先生の新論抔も講じ」たという(『資料』320頁)。その指導方法については、「講義は先づ抽籤で席順を極めて輪講をやる。此日先生の講じられる所を弟徒が先づ輪講をする。此の輪講する所は前日に充分に調べて抽籤順で各自に講ずると、先生が一々其誤解を正される。其一順せし時に始めて先生の講義が始まるが夫れは第一に文法を支分節解して、句法章法呼応眼目と文法上より講述し反覆せられ」たという。そして生徒の理解を促すために、「時事問題や処世方法や種々の方面に渉り所謂古を稽て今に徴するといふ活用的に説」いた(『資料』319－320頁)。

具体的には、1890年代半ばには「左伝の輪講に世界地図を披き、春秋戦国の欧亜の形勢に対比して説かれたものであります。今まの外交官は到底蘇秦張儀に及ばぬと云」うという具合である(『資料』343頁)。また、会沢の『新論』を取り上げる際には「平素尊王の大義を説かれ我国体の何たるを弟徒に知らしむるには専ら心を用ひられた」という(『資料』320頁)。国家的な時事問題を取り上げて実践への応用を訴える方針は、尊攘活動を積極的に行った高橋の理念が最も現れているところであろう。

つづいて、高橋は作詩文教育にも熱心だったようだ(『資料』320－321頁)。「詩文の課題月に二回若くは三回出」したのに加えて、「其他各自の試みる詩文は課題以外に添削を乞」うという形で塾生の自主的な学習も尊重していた。1880年代にはそれに積極的に呼応する塾生も少なくなかったようだ。武石貞松によれば「詩文は課題に出るものは甲乙の点を着けて下付せられるので、其甲に入るものを無上の光栄として誰の作が甲であるか早く見たいので書斎に忍び込んで私かに見て叱られる連中もある位熱心であった」という状況であったという。

高橋は作詩文について、「常に岡鹿門翁の文章を推称して居られました。塾生中でも詩文の上達した者は自分から勧めて鹿門翁の名山社に加盟させられた」という(『資料』341－342頁)。1890年代の塾生である丸田によれば、塾生の中には作詩文の水準が「世の学究的自尊の村夫子等にはナカナカ此の雅量は認めることが出来」ない高いものにまで到達した者がいたという(同上)。1880－90年代を通してた漢詩文の嗜好が塾生の中で価値があるとみなされていたことがわかるこれらの証言は重要である。

そして作詩文の課題については書籍の学習と同様の指導方法が貫かれていた。丸田によれば、「月に三回の文章の課題も多くは時事問題、丁度新聞の論説を漢文で書く様なものであります。(中略)私の在塾の頃は丁度内地雑居とか朝鮮事件とか日清開戦とかで、八ケ間敷時代でありましたので、自然時事問題を多く作らされました」という(『資料』343頁)。

また誠意塾では塾生が体を動かすことも奨励していた。塾生は「雑役か、一種の運動で撃剣も課せられた」。また遠足も行事として取り入れていた。「幼年者は幼年者相当の遊戯を試み、悠久山遊でなど時々やられて、少壮者は年に一二回必ず小千谷とか栖吉の鋸山とか近傍の山で往復十二三里位のとこまで游びに先生自から引率して出懸けられた」という。そこでは高橋の「戊辰当時の戦争談などを聴かさるることは極めて興味なる游びであった」という(『資料』323頁)。また、「弥彦の桜井郷に伊勢の遙拝碑と港川神社遙拝碑を立てられまして、毎年四月二十二日には塾生一同を引率して参拝せられ、併せて必ず弥彦神社を参拝して帰るを恒例と」した(『資料』341頁)。撃剣は幕末の志士が好んだところでもある。また、遠足の行き先や内容からしても、尊王家としての高橋の感情がカリキュラムにそのまま反映されていたといえよう。

第4節　誠意塾の塾生と学習歴

(1)塾生像

誠意塾の塾生像については、その門人帳から経済的・社会的階層などが判明する。その詳細については、筆者が別のところで明らかにしているので、ここではその概略のみを述べておきたい[10]。

表3からは、門人帳には600人ほどの入門者がいたことが判明する。年ごとの入門者数をたどっていくと、30名以上の入門者が記載されている年が、83年、84年、91年、92年、94年、96年、97年であり、閉鎖直前の1900年においても23人の入門者をみている[11]。ここからは、地域における漢学塾へのニーズが世紀を跨ぐ頃まで継続しており、誠意塾が衰退の末に閉鎖した訳ではないことがうかがえる。塾生の年齢については「其弟徒三十に近き人も居れば、十や十一二のものも居る」ということであったが(『資料』315頁)、門人帳から平均値を導き出すと、平均は16.2歳となる[12]。ここからは初歩的な識字を習得した子弟が親元を離れて入門寄宿した様子がうかがえる。

表3　誠意塾の入門者数

西暦	明治	人数
1881	14	18
1882	15	17
1883	16	40
1884	17	41
1885	18	28
1886	19	10
1887	20	28
1888	21	25
1889	22	28
1890	23	29
1891	24	45
1892	25	50
1893	26	26
1894	27	40
1895	28	28
1896	29	32
1897	30	34
1898	31	25
1899	32	22
1900	33	23
1901	34	13
1902	35	1
総計		603

出典：『誠意塾及門録』

安定して一定数の入門者を迎えた誠意塾は、その施設も充実していた。

長岡の殿町に私塾を開かれたのが十四年の事で、当時は居宅の二階二室に弟徒を収容せられたが、弟徒の進むに伴ふて西の方へ二階か四室下が講堂と運動場其他三室で、それも不足を告げ更に東の方へ二階三室下一室を築かれ東舎西舎と称して、居宅の二階は弟徒を置かぬことにせられた。(『資料』319頁)

長岡では「殿町の塾といふことに(ママ)通つて居ります」(『資料』313頁)というように、これだけの広さの施設を持った塾が地域でも著名になるのは当然なことだろう。

入門者の出自については、「其出身者は大抵地方素封家の子弟にして」(『資料』325頁)とか「塾では地方の資産家の子弟が多かつた」(『資料』339頁)というように、概ね地域指導者層を相手にしていたようだ。筆者の調査によれば、1887年から92年の入門者205名の内、衆議院選挙権が付与される地価600円以上の土地を有する地主層が、分かっているだけでも5割以上を占め、寺院出身者が1割弱を占めている[13]。ただし一方では、「学費に困るといふ篤志の人には、半月俸無月俸が多く、一時は十人も十五人もあった」という就学のための支援も行っていた(『資料』327頁)。なお、士族層の割合は不明である。しかしその割合は非常に低かったのではないかと思われる。それは、誠意塾が所在した旧藩所在地の長岡町出身の塾生は、1887年から92年にかけての入門者のわずか3.9%(8名)に過ぎないからである。寄宿専門とした誠意塾には、町内よりもむしろ町外の農村部の者に好まれたといえる。

(2)塾生の学習歴

では、誠意塾を選んだ地域指導者層の子弟はどのような動機で門を叩いたのだろうか。その多くについては、「在塾生の多くは進んで唾手青雲に攀づると云ふ者より、退て田園を守り地方の中堅となる方であつた様に思はれます」(『資料』343頁)というように、多くが高橋の教育方針に合致した学習歴を歩んだ者であったようだ。

しかし、塾には高橋の方針と合致しない思いを抱く者も入門していた。たとえば、手記を寄せた丸田である。彼は1893年5月に17歳で入門している。彼の入門動機は次のようである。

其頃は今日の如くでなく、小学の課程を了(を)ひました私の教育方針を如何に定むべきやとは、私の父の尤も苦心したところであります。父は上京して同郷の岡村為蔵、星野輝賢二氏に相談しましたが、最後に芳野世経翁の言はるるには、「今ま直ぐに自分が預つてもよいが、十五や十六の子供を東京へ出して教育すると云ふ事は弊害があるから、今暫らく地方で修業させた上の方がよい。越後なら長岡に高橋竹之介と云ふ立派な方が私塾を開いてある。此の人に託した方がよい」と、云はれたので早速帰国して私を携へて先生の門に贄を執らしたのであります。(『資料』338頁)

上京遊学を前提とした彼は、その準備期間として誠意塾に入ったことがわかる。

また、他にも誠意塾を出て「退て田園を守り地方の中堅となる」前に、さらなる「学習歴」を歩んだ者がいたようだ。1881年に入門した武石は次のように記している。

今西班牙代理公使たる堀口九萬一君(長岡町・84年入門—筆者注)が司法省の法学校の受験のため論孟と通鑑を読むために入塾して、(中略)自分は兎に角堀口君は入学試験の準備で、当時試験料なき時代ずいぶん替玉受験もある時分で、(中略)受験者もウカウカして居られぬ為めに、百巻以上の通鑑が、どこが出るのが分からぬ苦辛は容易でない、其懸命に読むのも当然で自分も御蔭で読む御相伴した。(『資料』322頁)

この例などは、まさに「学問を以て身を立つる」準備として入門した事例であろう。また丸田は次のように述べている。

私の承知して居る先輩では寒川岩船郡長(卯之七、長岡町・83年入門)、渡辺県検米所長(廣吉、入門年出身不明)、伊沢三條中学教諭(忠か、刈羽郡佐藤池新田・87年入門)等があります。武石弘三郎君(南蒲原郡長呂・85年入門)の彫塑家としての成功は特筆すべきものであります。私と同時代の人では小林音八君(南蒲原郡今町・92年入門)が

台湾総督府参事官、川上漸君（古志郡摂田屋・92年入門）が京都大学助手など前途好望であります。宮島邦衛（南蒲原郡吉野家・91年入門）君の如きも錚々たる俊秀であります。(『資料』343－344頁、括弧内は筆者注)

1890年代前半においても「身を立つる」ステップとして、漢字塾のようなノンフォーマルな教育機関が選択肢に選ばれていたことについては、特筆すべきであろう。

（3）学習歴への認識

そして、塾生自身は漢学塾に在籍するという学習歴をどのように捉えていたのだろうか。この側面を示す興味深い記録が残されている。以下は丸田の手記である。

其の頃の長岡はまだ今日の様ではありませんでしたが、中学生などは既にハイカラの所がありました。殿町の塾生に対し蔭では蛮勇だナド評して居つても、向つてこいば殿町塾は一騎当千で公園に散歩して居つても殿町の塾生に逢ふとスコスコと逃げて帰つた位のものでありました。(『資料』339頁)

ここに出てくる「中学生」とは1893年に郡立中学校として、従来の私立学校から再設立された長岡尋常中学校の生徒である。1880年代半ばのことになるが、長岡学校の学生との比較については、武石による次の手記もある。

兎角年少時代私立長岡中学の生徒諸子が袴でも着けて歩行せらるるのが学生らしく見ゆるので、時々仲間同士で相談して嘆願して見たが一言の下に叱り飛され、お前達は前掛で沢山だと頭から取上げられぬので、いつも御話にはならずに袴一度つけたこともないといふ風でした。(『資料』314頁)

93年の時には長岡中学校の学生がどのような格好をしていたのかは不明であるが、少なくとも「袴」を着用して外出するなど誠意塾の塾生と比べると「学生らしい」恰好で活動していた様子が分かる。それに対して誠意塾の塾生は、「前掛で沢山」「蛮勇」という評のような簡素な恰好をしていたとみられる。しかし、中学生が「スコスコと逃げて帰つた」という表現からは、むしろ「蛮勇」であることを誇りに思う塾生がいたことがうかがえ、またそれがフォーマルな教育を受ける中学生に一目置かれる、さらには恐れられる存在でもあったことがうかがえる。誠意塾のようなノンフォーマルな教育機関を選ぶことが、まだ劣等感を植えつけるようなものではないことが明らかにされる。

第5節　誠意塾と明治の漢学塾

以上、誠意塾の指導方法、カリキュラム、塾生の学習歴を検討してきた。その内容は、同時期の漢学塾と比べてどのような特徴がみられるのだろうか。

まず誠意塾の生活上の指導については「地域指導者層育成」という役割に意識的であった。この側面は、高橋が幕末に通った西蒲原郡の長善館も強く意識していた。長善館には指導方針に関わる1886年2月の文書が残されている[14]。

学問ニ従事スル者ハ中人以上ヲ多シトス。此種ノ子弟衣食已ニ余アリ。使隷亦タ足ル。媚ル者衆ニシテ諫ル者稀ナリ。何ニ由リテ其過失ヲ知ラン。故ニ偶マ厳師ヲ得ルニ其撿末ニ堪ヘス託言以テ己レニ便ニシ専ラ安佚ニ就カンコトヲ図ル。然トモ骨肉ノ恩情ハ終始間断アルコトナク平居無事猶ホ為メニ思慮ヲ労スルコト也。此ノ恩情ヲ以テ彼ノ艱難ヲ聞ク。此ニハ哀憐ヲ生シ彼ニハ放肆ヲ長ス。嗚呼此ノ如クンバ、啻タ進テ事業ヲ成スコトヲ得サルノミナラズ、退テ一身一家ヲ保ツコト、蓋シ亦タ難カラン。而シテ教育此ニ至リ又タ施ス可ラサル也。子弟ヲ本館ニ託セントスルノ父兄ハ宜ク先ツ老牛舐犢ノ愛情ヲ猛制スベシ。是眞ニ其子弟ヲ受スル者ナリ。(句読点筆者)

このような「地域指導者層育成」が重視される背景の1つには、明治期になると漢学は、幕末以来の西洋の哲学、思想の流入によってもはや世界観を独占できず、学問上の優位性を失いつつあったことが挙げられる[15]。学問上の意義を失いつつある以上、生活上の指導の側面が浮上してくることは避けられないだろう。

なお「地域指導者層育成」の方法については、誠意塾の方法が長善館と全く同じという訳ではない。

たとえば長善館では、金銭管理は塾生個人の管理とされていた。都市と農村という立地の違いが現れているかもしれない。また誠意塾では全員が寄宿を義務づけられた。この点は他に対する特殊性が大きいと思われる。生活上の指導を意識する漢学塾の中でも、誠意塾は教育の環境を統制する意図がより強く働いたのではなかろうか。

つづいてカリキュラムとその指導方法については、誠意塾もまた漢学塾の新たな動向の影響を受けていたように思われる。それは、カリキュラムに歴史関係の書物が多数取り入れていることである。誠意塾では『日本外史』『十八史略』『春秋左氏伝』『蒙求』『綱鑑易知録』『資治通鑑』といった歴史書が掲げられている。東京に設立された漢学塾の教則を多数調査した神辺靖光は、明治期の漢学塾のカリキュラムには歴史書が占める割合が大きくなったと述べている。また厳密には「漢学」とは言えない国典のテキストも登場し始め、カリキュラムはさながら「和漢学」の様相を呈し始めたとも述べている[16]。新潟県内の場合でも、長善館は明治初期に和漢の歴史書を新たに正式なカリキュラムの一部として位置づけている[17]。

また神辺は、作詩文の重視という点も明治期の漢学塾がもつ特徴であると述べている。繰り返しになるが明治期の漢学はその学術的な優位性を失いつつあった。そうした中で、漢学の意義として浮上したのが交流の手段としての意義でもあったようだ。すなわち、自由民権運動期の活動家は自分の思想や感情を漢詩文に託して表現したことが知られる[18]。また、上京遊学者が新たに人脈を広げていく上で漢詩文を伴った宴席で、その技能を披露することが求められる場合があった[19]。誠意塾のカリキュラムも、以上のような時流の中に位置づけられよう。

とはいえ、そのカリキュラムにも誠意塾独自の内容があったとみられる。たとえば、誠意塾では『新論』が重視されていたが、神辺が調査した明治初年の東京における漢学塾では、『新論』は教科書に取り上げられていない[20]。この点は、高橋の尊王論者としての性格がカリキュラムの独自性に現れていると考えられる。また高橋によるカリキュラム指導の特徴は、他の漢学塾で用いられる教材を解説する際にも現れてくることだろう。詳細は明らかでないが、たとえ他の塾と教材の共通性がみられるとしても、内地雑居や朝鮮事件を取り上げて解釈を加えていく中で、指導の独自性が発揮されたのではないか。

そして塾生の学習歴形成の面でもまた、誠意塾は時代の影響を受けているといえる。入江宏によれば、「明治期の漢学塾は近代的な「スクールシステム」(筆者のいうところのフォーマルな学校体系―筆者注)の形成期に会し、好むと好まざるとにかかわらず、スクールシステムと一定の緊張関係をもって存在するか、または、積極的にそのシステムに自らを位置づけて存続する途を選ぶ」ことを迫られたという[21]。具体的には、漢学塾は自らを「実用的な義務教育課程では満し得ない基礎教養形成の場として」位置づけるか、「大学等高等教育機関への進学を希望する青年たちに対しては必要な学力を身につけさせる予備校的存在」として位置づけることを迫られることになった[22]。

この論点を誠意塾に即してみれば、誠意塾は塾主の指導方針としては「義務教育課程では満し得ない」「地域指導者層育成」の側面を強調したといえる。だが塾生の学習歴形成の実際からみれば、誠意塾は「予備校的存在」といえるような役割も果たしていた。塾主の方針に関わらず、実際は時代の影響を大きく受けていたと言わざるをえないだろう。なお誠意塾では司法省法学校入学の事例が挙げられていたが、先行研究では明治前期の軍関係学校入学の事例も明らかにされている[23]。当時の法令を敷衍して、漢学塾を「袋小路的な性格の学校であった」と即断してはならない[24]。

最後に、漢学塾を学習歴に選ぶという選択への自己認識について検討したい。誠意塾の塾生の一部は自らが漢学塾生であることを自ら誇りにしており、それが服装にまで象徴化していた。このことは誠意塾に特別の事ではない。後世とは異なりノンフォーマルな教育機関に通うことは学習者にとって劣等感を植えつけるようなことではなかったのである。たとえば神辺によれば「彼等の服装は蛮風で無帽、または編笠をかぶり、夏は単衣に小倉袴、素肌裸足、冬もシャツは着ず布子に木綿、雨の時も合羽は着ず、番傘片手に高足駄を鳴らして大道を闊歩」する漢学学徒の姿が同時代の文学作品や回想録に頻出するという[25]。また神辺は、まことしやかな話としてやや古い資料であるが次のような新聞の記事を論文中に添付している[26]。

頃日浅草御蔵前にて漢学書生体のものと洋学書生

体の者と同行せしが漢学書生体は例の白小倉の襠袴、高足の下駄を履、朱塗の大刀を横帯、銭骨の扇を携へ大道狭しと歩き来るに折柄独歩して来る洋人ありしに漢書生眼を怒し臂を張、洋書生を見帰り、君に問う醜夷は何国の者ぞ。洋書生独乙なりと答へしに漢学生扇を洋人の面部にさし、どいつなりと云はるる由。(『東京日々新聞』72年6月26日)

ここでは漢学学徒と洋学学徒が登場している。その中で漢学学徒は異様な風体で道路を闊歩し、西洋人にもおくびともしない態度を貫こうとしている。ここで洋学学徒は質問に素直に答える脇役として登場し、対応する漢学学徒の豪胆なイメージがひきたてられている。誠意塾生と長岡中学校生徒との間にみられる対比が、ここでも示されているといえる。

おわりに

明治期に生まれた誠意塾は、「地域指導者層育成」の重視、和漢学・作詩文を重視したカリキュラム、上級学校への予備学習的な役割など、同時代に存在した多くの漢学塾と同様に時勢に応じた特徴を有していた。とはいえ、その教育を具体的に探っていくと、寄宿義務を課す指導方針、カリキュラムの具体的な指導内容など、その独自性が発揮される側面も含まれていたといえる。その共通的な側面・独自的な側面の双方を含めて誠意塾という漢学塾は人々を惹きつけていた。それは、多数の入門者、地域での名声、手記の内容をみれば明らかであろう。

1880－90年代にかけて各地に漢学塾をはじめとするノンフォーマルな教育機関が多数存在した。誠意塾の塾生に示されたように、人生の針路を模索し始めた子弟やその父兄は、それぞれの意図をもってフォーマルな教育機関に限らずノンフォーマルな教育機関も視野に入れて学習歴を蓄積させていた。その有力な選択肢として漢学塾が確かにあった。そして、それぞれの塾がそれぞれに共通の／独自の魅力を有していたからこそ、1890年代にかけて求められつづけたのだろう。

世紀をまたぐ頃になると漢学塾は減っていく。だが漢学を含む教育機関は、フォーマル・ノンフォーマルを問わずに残っていく。明治末期から大正期にかけて、漢学を学ぶ意味はどのように変容していく／維持されていくのだろうか。この点に関しては、指導方針、カリキュラム内容、機能のいずれをとっても実証的な研究は十分なされていないのが現状である。研究の本格的な着手が望まれる。

注

1）日本生涯教育学会編『増補版 生涯学習事典』東京書籍、1992、45頁（渋谷英章執筆）。フォーマル・ノンフォーマルという組織化された教育に対して、「組織的、体系的ではなく、習俗的、無意図的な」教育は「インフォーマル」(informal) と区分される（同前、44頁、渋谷執筆）。

2）「道府県統計書にみる各種学校の全国動向―教授内容と地域性を中心に」土方苑子編『各種学校の歴史的研究―明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008。「明治前期における「学び」を支える人脈―青少年教育に関連する民間施設としての漢学塾をめぐって」幕末維新期漢学塾研究会・高木靖文編『近世日本における「学び」の時間と空間』渓水社、2010。「明治後期における女子教育の一断面―私立裁縫女学校の地域内展開と歴史的位置」『研究室紀要』32、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、2006。「19-20世紀転換期における農村の塾と館主の変容―新潟県長善館をめぐる「中等教育」・「青年教育」・「地域指導者層育成」」『研究室紀要』35、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、2009。「明治の漢学塾と青少年の教養形成―新潟県長善館における文芸教育を事例として」『国立青少年教育振興機構研究紀要　青少年教育フォーラム』9、2009。「遊学者の日記にみる明治10年代の学習遍歴とアーティキュレーション」『中等教育史研究』16、2009。「近代日本における私塾を問う視点―学習歴の社会的評価とカリキュラムへの着目」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49、2010。「1880年代半ばにおける農村の私塾―新潟県西蒲原郡長善館における教則改定をめぐって」『日本の教育史学』53、2010掲載予定。Masanori I, *Genealogies of the "nonformal" educational system in modern Japan*, Graduate Summer School in Asia-Pacific Week 2010, ANU, Canberra, AUS, February 2010.

3）神辺靖光『日本における中学校形成史の研究〔明治初期編〕』多賀出版、1993。幕末維新期漢学塾研究会・生馬寛信編『幕末維新期漢学塾の研究』渓水社、2003。Margaret Mehl, *Private academies of Chinese learning in*

Meiji Japan—the decline and transformation of the kangaku juku, Copenhagen, NIAS, 2003.

4）江村栄一『自由民権革命の研究』法政大学出版局、1984、第６章。

5）『新潟新聞』90.2.1。

6）拙稿、前掲「道府県統計書にみる各種学校の全国動向」。

7）北越新報社編『長岡教育資料』北越新報社、1916。以下、当資料からの引用は（『資料』頁数）という形で文中に示す。

8）門人帳の『誠意塾及門録』（長岡市立図書館所蔵）には、1902年入門の塾生が記載されている。

9）拙稿、前掲「19-20世紀転換期における農村の塾と館主の変容」。

10）拙稿、前掲「明治前期における「学び」を支える人脈」。

11）1884（明治17）年の長岡中学校の生徒の属籍構成を見ると、生徒総数89名中士族は長岡町内の22名だけでそれ以外は平民であることが分かる（『長岡市史資料編４近代１』）。誠意塾に比べると士族の割合が非常に高い。

12）入門年齢が判明する581人から導出。

13）拙稿、前掲「明治前期における「学び」を支える人脈」。

14）『長善館学塾資料』（新潟県立文書館所蔵）資料番号394。

15）渡辺和靖『増補版　明治思想史―儒教的伝統と近代認識論』ぺりかん社、1985、361頁。

16）神辺、前掲書、860－863頁。

17）鈴木虎雄編『鈴木文台先生年譜略』1929、附録10－12頁。

18）色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970、Ⅳ章。

19）拙稿、前掲「明治の漢学塾と青少年の教養形成」。

20）前掲、神辺、860頁。

21）入江宏「明治前期「漢学塾」の基本的性格」前掲『幕末維新期漢学塾の研究』46頁。

22）同上、47頁。

23）広田照幸『陸軍将校の教育社会史』世織書房、1997、43頁。

24）吉岡栄「漢学私塾自南学舎考」前掲『幕末維新期漢学塾の研究』412頁。

25）神辺「明治初年の東京府の漢学塾」前掲『幕末維新期漢学塾の研究』、299頁。

26）同上、300頁。